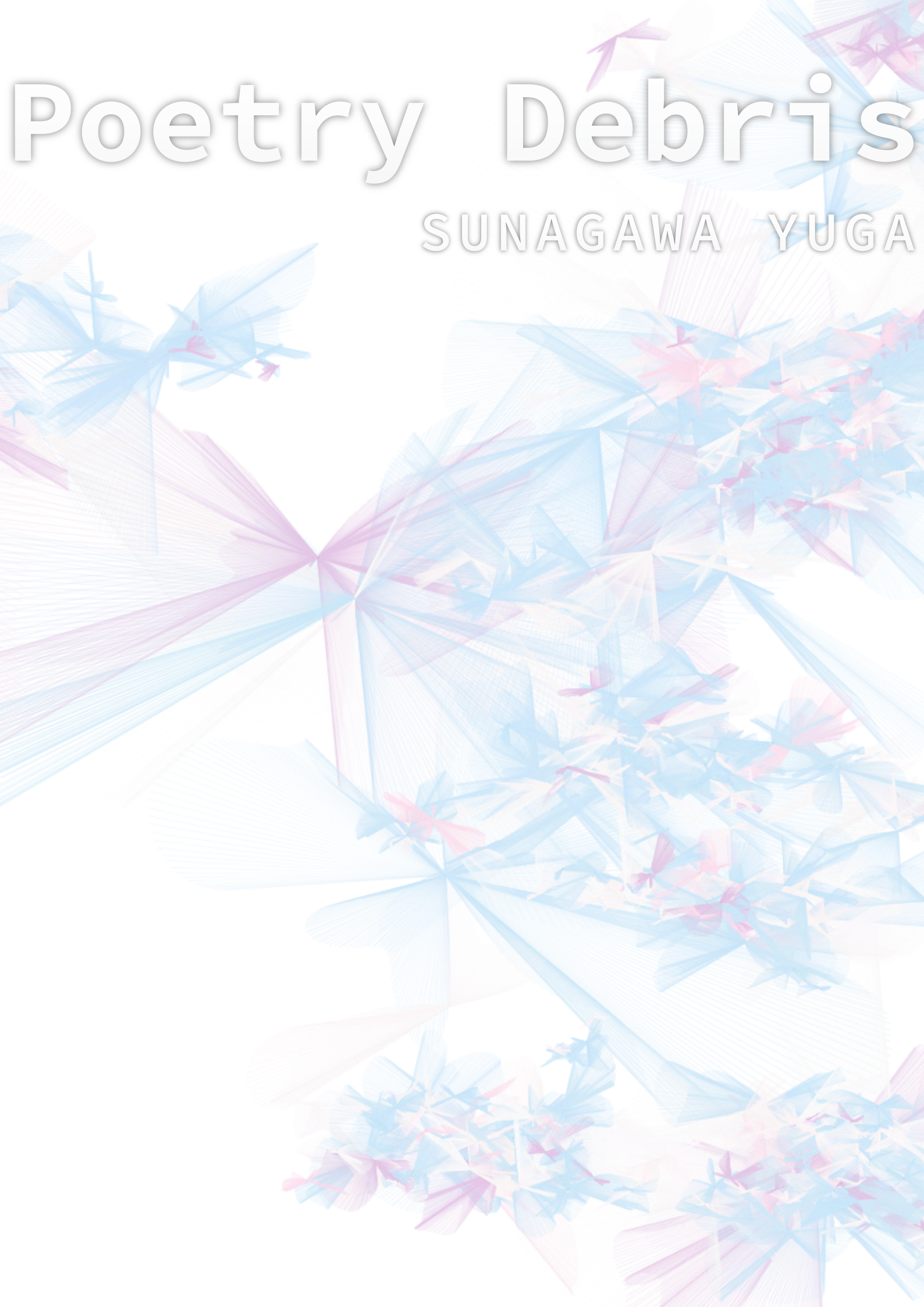


Poetry Debris

SUNAGAWA YUGA



砂川 由雅

Poetry Debris

目次

忘れられた肉塊	4
胎児の夢	8
かなた	10
哲学者も詩人もいない世界	14
移ろいなき移ろい	16
観葉植物	18
転換期	20
記憶	22
変身	26
吊された者	28
あとがき	30

二〇一九年八月—二〇二〇年八月

忘れられた肉塊

真っ白な美術館の中央に

座椅子くらいの大きさの

肉塊のオブジェが置いてある

近寄って見てみると

緑色のぬめぬめとしたいくつもの筋が

赤色のなめらかな曲面を流れて

水筒くらいの太さの

真っ暗な空洞に落ちている

においを嗅いでみても

まわりの観客の汗や香水がつんとするだけで

生臭さは感じられない

観客はオブジェを囲んで

目を見張ったり 首を傾げたり 耳打ちしたりするが

作者や題名がわからず手にあまり

ひとり またひとり

素知らぬ顔で去っていく

日が暮れて

人とも 動物とも

どちらともつかない呻き声が
街の隅々から聞こえてくる

胎児の夢

緑の子供はしなやかな肌に憂いを灯し、庭に甘い香りが立ち込める。
私は彼らと共に大地を駆け巡り、私の髪を季節の悲しみが湿らせる。

風は母、私は肢体を広げ、海を行く。涙を隠す彼女はどこへ。

もう後には戻れない。故郷は朱色に燃え上がる。皮を剥がされた裸
形、轟々たる金属音、私は存在に囚われ溺れ行く。海と空は煤煙の息
吹に翻弄され、紫色の内に融解する。

光はどこへ——死が奪う。光はどこに——艶が満たす。黒く焼け爛
れた二つの虚空に百合の幻影が降りしきる。

そして、まただ、秩序ある事物は燃え盛る。上り詰めても逃げられ

ない。死児の声は私だ、否、私ではない。白く輝く灼熱の流転は死臭と芳香に閉ざされる。断絶に靠れる祭儀は尽れ、黒々とした墓石が地上に峙つ。

やがてすべては暗闇の大きな眼差しに抱かれる。暗闇はそよ風にすぐられ、つぶらな笑いが庭先に宿る。

かなた

俺はダダイストになりたくない

卑しい破滅を頬張るカタツムリの

ぬめぬめした滑走路に埋もれるのはまっぴらだ

俺はなりたい

海と空

俺は想う

月に住む人

俺はかつて

夏の木漏れ日

俺は帰りたい

オレハカエリタイ……

俺は哲学者になりたくない

俺は詩人にもなりたくない

俺はなりたい

サックスとトランペット

赤ん坊の微笑み

偉人の言葉

すべての音は移ろいゆく

透明な砂漠のもとへゆく

俺はシュルレアリストになりたくない

色彩の宝石を鏤められたイグアナの

ぎらぎらした王冠を被るのはごめんだ

俺はなりたい

眼差し

俺は想う

彗星の涙の

俺はかつて

夕暮れの地平のまどろみの

俺は帰りたい

オレハカエリタイ……

哲学者も詩人もいない世界

人間存在の普遍的な問いを解消することに一生を捧げる者が哲学者であるならば、詩人とは概して自らが一個の解けない問いであろうとする者のことであろう。もし哲学者も詩人もいなくなったなら、世界が問うことも答えることもやめたなら、野原に咲いている、あるいはもう咲いてはいない、見知らぬ花はさぞ美しいことだろう。どこもかしこも存在は平等に爛漫と、平和な一日／＼は淀みなく過ぎゆくことだろう。哲学者も詩人もいない世界には、詩人が一生を捧げても書き切ることのできなかつた、どこか荒涼とした美しさがある。

移ろいなき移ろい

言葉のない思想はどこにある

音のない音楽はどこにある

己のいない風景はどこにある

たやすく移ろう心を満たす

移ろいの不在はどこにある

確かなものはどこにある

たやすく移ろう人の心に刻まれた

他者の不在以上に

確かなものはどこにある

新たな思想はどこにある

新たな音楽はどこにある

新たな風景はどこにある

移ろいなき移ろいはどこにある

観葉植物

お前の内側に潜む何者かが

しなやかな枝葉を揺さぶった

それは

自由へ誘拐しようとする太陽の意志か

それとも

逃亡を阻止しようとする大地の呪詛か

どちらにせよ

チェンバロの即興演奏のように

「唐突」に満ちたお前の外側は流れゆき

お前自身をも凌駕する

お前を規定しようとする敬愛すべき思想家どもを

異形のオブジェで揺さぶり尽くせ

そして浮遊する生命の驚きを

ともに踊り尽くしましょう

伸びる のびる

空高く

お前は一個の超越だ

轉換期

私は十二歳のとき 私の起源を名詞のうちに見いだそうと試みた すなわち川はもとの川のままではなかなければならなかった だから私の外側があえなく零れおちるとき 内側では不動の生を創造した こうして青春を蝕む倒錯はやがて私を飛躍へと駆りたてた すなわち静物であろうとする者はけっして静止してはならないということを私は学んだ だから私の飛躍は地上を歩きだした だから川の流れを掬いあげてもなお私の手のひらのうえを流れるものがあるとき 私はいききた生

を享受するあらたな動詞となる

記憶

子供たちの秘密を守る

黄金の輝きはあっただろうか

グラウンドを這う蟻を集めては

池に溺れさせた遊びに

鬼ごっこをしていた男の子が転んだとき

腕から流れた真っ赤な血に

はぐれ者がひとり教室に残って

窓越しに見つめていた青色の空に

わずかな寂しさと空腹を抱いて

帰りは薄暗い路地を歩んだ

夕暮れは今日の残酷を包み隠し

まどろみは今日の喜びを掻き消し

子供たちは皆はぐれ者となり

ひとり眠れない夜を耐えなければならなかった

彼らの明日への不安は

空のように広く青かった

ある者は黄金の輝きへと飛び立ち

やがて彼らの秘密など忘れてしまった

またある者は青色に溶け入り

秘密そのものと化したのである

変身

朝、目が覚めたとき、私が一匹の蟬に変わっているなら、そのときたまたま部屋の窓が開かれているなら、私は刹那の自由を勝ち取るとともに、他の蟬たちに引け目を感じるであろう。

私が人間でないことを喜ぶとき、長年の地下生活を経験した彼らは、生そのものを謳歌する。私が蟬であることを後悔するとき、彼らは彼らの生を全うする。

地面に落ちた彼らのぎらぎらとした胴体が、蟻の群れに運ばれてゆくのを眺めながら、私は最後まで彼らの思いを理解できないまま、生命の儚さに心を奪われてゆくのであろう。そうして、私は地下へと墮

ちて行く。

朝、そのような長い夢から目覚めたとき、夏の緑に降りそそぐ蝉の鳴声を懐かしく思いながら、私は人間であることの不幸にも一点の輝きがあるということに、ほのかな喜びを感じるのである。

吊された者

旅立ちだ、

思想の飢えを癒すために。

だが、いったいどこへ出向くべきか。

私の天性の傲慢はどこでもない場所、

煤けたアパートの二階の部屋の窓から、

—— 網戸越しに見える風景は、原始の抽象に私を還す。——

首を一振り、「否」を放つと、

異郷の地へ通ずる人間の営みの

爛漫たる拒絶が待ち受ける。

私は窓の外へ投げ出され、

均衡を失い、痛みに襲われ、

——「痛み」とは、「自由」に他ならない。——

嘘と実の残虐の歴史は上昇し、

下の方では紺碧の荒原が、

私の歩みをやさしく迎え入れる。

存在に棚引く言葉のざわめき、

あとがき

——『Poetry Debris』というタイトルについて

詩集はそれぞれの詩に何かしらの共通部分があった方がシームレスで読みやすい。でも、人の思考は時々刻々と変化するもので、実際にそれが詩作にも現れてくる。だから、一年分の詩に統一性がなく、破片 (debris) のようにばらばらであるのは当たり前で、むしろそれを肯定的にとらえたい。そうした思いからこのタイトルをつけました。

——表紙について

表紙の絵はプログラミング言語・ソフトウェアである Processing を使って描きました。「ジェネラティブ・アートに興味がある」、「プログラミングを楽しく学びたい」という方はぜひ Processing をさわってみてください。

—最後に

これからもぼちぼち詩を書いていきたいと思えます。最後までお読みいただきありがとうございます。

Poetry Debris

掲載日 2020年9月19日

著者 すながわゆうが 砂川由雅

Twitter @sunagawa_yuga

